

モニタリングサイト1000 里地調査ニュースレター

No. 13 (2014 Apr.)



今回の表紙：早春の中須北地区

事務局からのお知らせ

全国サイト間交流会 2013 を開催しました

後藤 なな

里地調査は、本格的な全国調査を開始してから2013年度で6年目を迎え、順調に調査結果を蓄積してきています。一方で、調査を“始める”段階から“継続する”ことが重要な課題となってきました。そこで2013年度の全国サイト間交流会では今までの調査成果を発表するミニシンポジウム、5年先の将来像を語り合い実現に移すための行動計画づくりのワークショップ、そして調査を継続する上で重要な種同定のスキル向上のための研修会を2日間に分けて実施しました。

ミニシンポジウム

2013/11/10 @ 大阪府立大学「I-site なんば」

今回の交流会は、関西地方で初めてとなる大阪での実施となりました。そこで、調査員同士の情報交換と一般の方にむけた市民調査の普及のためのミニシンポジウムを大阪府立大学「I-site なんば」（大阪市浪速区）にて開催しました。ミニシンポジウムでは、環境省からモニタリングサイト1000全体の概要や市民調査にも活用できるインターネット上のシステム「いきものログ」の紹介（詳細は巻末参照）、NACS-Jから市民調査の意義や里地調査の概要、今までの調査成果の発表を行いました。また、関西地方のサイト3組からはサイトの紹介や特徴的な調査活動の報告をしていただきました。

サイトからの報告の1組目は、コアサイト「穂谷の里山」（大阪府枚方市）で調査をしている大阪自然環境保全協会と枚方いきもの調査会の皆さんからの発表でした。里地調査のサイトで唯一実施している“トンボ類調査”の調査成果や、地元農家の方への報告会の様子などを紹介いただきました。次に、大阪府池田市の「五月山緑地」で調査をしている五月山グリーンエコーさんから、順応的管理の一環として調査に参加された経緯やシカによる食害の進行が深刻である現状を共有して



トンボ類調査の発表

域の方を巻き込む工夫と5年間の調査活動を節目に発行された調査報告書について発表いただきました。質疑応答でも活発に意見交換がなされ、今後の調査活動を鼓舞しあう場となりました。

行動計画ワークショップ

2013/11/10 @ 大阪府立大学「I-site なんば」

ミニシンポジウムの後には、今後調査を継続していくための課題を共有し解決を目指すために、調査員や専門家、事務局などの里地調査関係者全体で話し合うワークショップ（以下、WS）を実施しました。このWSでは、課題解決のためのアイデア出しで終わらず、具体的な実行体制も盛り込んだ『行動するための計画書』を作ることを目的としました。

まず、参加者は「仲間を増やす」「データを活用」「続けていく」という3つのテーマから議論したいものを選びグループに分けられました。グループワークでは、選んだテーマの中でも特に話し合いたいトピックを出し合いました。そして、そのトピックについてなるべく具体的な5年後の理想像を語り合うとともに理想像と現実との間のギャップや課題を洗い出し、解決するためのアイデアを出し合いました。

これらの行程を踏まえ、最後に「5年後にむけての行動計画」を作成しました。課題解決のアイデアをいつ、どこで、誰が実行していくかという具体的な行動計画を作成し、出来たものを“達成する難易度”と“実行して得られる効果”の2つの視点から評価します。

出来上がった行動計画はグループごとに発表いただきました。ユニークな計画がたくさん発表され、例えば「仲間を増やす」ための『モニ1000里地学生インターン制度』、「データを活かす」ための『行政施策を変える人材育成（のための50年計画のはじめの5年）計画』、里地調査全体の知名度をあげる『駅前モニ1000里地ギャラリー計画』などの計画が提案されました。

参加者の集中力と知恵を結集して出来た行動計画の



ワークショップの様子

中でも、事務局としても支援すべき意義が高いものは今後の事業の中・長期計画に反映させていきたいと思えます。また、今回は全国から集まった交流会参加者で作成しましたが、行動計画は普段一緒に調査をする仲間同士でも作ることができるのでぜひ挑戦してみてください。里地調査を楽しく継続していけるように一人ひとりのアクションをつなげていきましょう！

もっと詳しく知りたい方へ

- CAP (保全行動計画) デザインワークショッププログラム：
<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/waytob/workshop/2012/01/cap.html>

調査技術向上研修会

2013/11/9 @ 大阪市立自然史博物館

調査を開始するときや継続的な調査をするなかで、大きな課題となるのが調査に必要な“同定能力”です。今回、特に種数も多く難易度の高い“植物”の同定能力に着目した調査技術向上研修会を、大阪市立自然史博物館（以下、大阪自然史博）で開催しました。研修会では植物を個々に同定する実習だけではなく、この研修会を通じて今後も各地域で持続的に調査スキルを向上し継承していけるように、地域の博物館との連携方法や次世代への同定能力レクチャーについても話し合える場としました。

最初に、会場である大阪自然史博の佐久間大輔さんより地域の博物館の果たす役割について発表いただきました。大阪自然史博では市民との連携に力を入れており、多くの事例を織り交ぜながら博物館と市民の良好な関係づくりについてご紹介いただきました。



調査時に使う図鑑についての意見交換

続いて、植物の種同定のスキルアップのための実習を行いました。実習の講師をしていただいた帯広百年記念館の持田誠さんはコアサイト「帯広の森」で植物相調査の主担当もされており、北海道大学を中心に展開している「パラタクソノミスト養成講座（以下、パラタク講座）」の植物分野の講師もされています。今回は、そうしたパラタク講座の内容を凝縮して盛り込んでいただきながら、実際に調査現場で必要とされている植物同定の手法などを教えていただきました。（次ページ参照）

実習後には、日頃の調査で直面する悩みや課題、成功事例などについて講師と参加者の皆さんで話し合いました。同定に関する悩み、標本採集におけるマナー、各地での博物館との関係づくりについてなど、さまざまな話題が提供されました。

そして、研修会の最後には「パラタクソノミスト養成講座」を展開している北海道大学総合博物館の大原昌宏さんから、パラタク講座についてご紹介をしていただきました。発表では「地域の自然の“貴重さ”を理解するためには、その“貴重さ”がわかる人を養成しなければならない」という言葉がありました。そのためにも、地域の博物館のような専門機関と市民がより一層つながっていくことが鍵となっていくとされています。

短い時間でしたが、とても濃密な内容が詰まった一日となりました。今後も、こうした研修会を充実させながら市民調査と博物館の連携を強めていく取組みを進めていきたいと思えます！

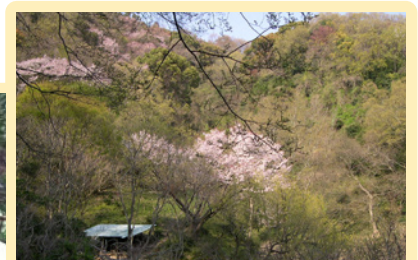
もっと詳しく知りたい方へ

- パラタクソノミスト養成講座：
<http://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/article/1/>
- NACS-J モニ 1000 里地調査：
<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/moni1000/>
 こちらに当日のスライド資料を公開しました。

調査員からの声

「モニ 1000 は僕らの活動の通信簿」

中川 勝弘 さん
 一般サイト「五月山緑地」(大阪府池田市)



春の五月山緑地

五月山グリーンエコーでは大阪府の北部、池田市にある五月山緑地で、生き物がにぎわう公園づくりを目標に森林整備や公園管理を続けています。草刈りや間伐といった自然にダイレクトに働きかける活動内容のため、モニタリングによる順応的管理の必要性を常々感じていました。そんな折に里地調査を知り、自分たちの活動にいわば通信簿をつけるつもりで、植物、鳥類、チョウ、中・大型哺乳類、そして植生図調査という5つの調査項目での参加を決めました。

参加から5年が経ち、調査結果では鳥類もチョウ類も森林性や林縁性のものを中心に30種前後が毎回カウントされ、この辺りの低山で普通に見られる自然と言えるような環境であることがわかってきました。哺乳類調査の結果からは12種が確認されています。アライグマ、ハクビシンなどの外来種やネコも問題となっていますが、増え続けるニホンジカによる林床の植物への影響がこのところ顕著だと感じます。ササの後退は年を追う毎に進み、気が付けば不嗜好性の植物が目立っており一部裸地化し始めています。5年間の植物相調査の結果から見ても、開始当初の2年とその後の2年で植物相が微妙に違っており、今後の推移が気掛かりです。鳥類調査でも個体数をみると、ウグイス、ヤブサメ、クロジなどの林床性の鳥が減る傾向にあり、これもシカの食害の影響なのでしょう。ただ、これらの結果も調査を続けているからこそ分かる事で、継続の重要性を実感しています。

運営上でも、日程の問題、参加者の固定化、同定精度の問題など等、続ける事の難しさも感じます。それでも、メンバーの生物多様性の意識が以前より高まっており、里地調査が管理の意味の浸透への助けになっています。また毎日登山の人とも顔馴染みとなり、生き物の話題も広がり、一般の方への感心を高める一助となっているかも知れません。今後も楽しみながら地元の自然を見つめ、活動を通じてその大切さを発信して行きたいと思えます。

～調査技術向上研修会～

野外調査に役立つ植物同定のポイント

持田さんが研修会で紹介された、実際の調査で仲間と植物同定をするときのポイントをまとめました。

■ 里地調査での同定作業の実際

- 1) 野外で考え込んでも時間を食って疲れるので、標準製作方法を覚え、わからないものは採集して検索表で同定するよう心がける。
- 2) 無理に難しい分類群を独力で理解しようとせず、最初はわかりやすいものから正確にデータをとるようにする。
- 3) モチベーションを保つために、例えば年に1回、専門家を招き同定研修会をしたり、みんなでパラタク講座などに参加するのも良い。
- 4) 専門図鑑の存在を知る。
(『イネ科ハンドブック』『日本のスマイル』など)

採集マナーや希少種は持ち帰らないなど、配慮が大切です。

イベントに参加するのは地域の専門家と知り合いになるチャンスでもあります！

■ 同定能力を向上させるためのポイント

- 1) 分類体系を正しく理解する。
- 2) 野外観察で種名を覚えたり確認するときには、何科の植物かを理解できるようにする。

科？属？種？
亜種・変種とは？

「科」の顔つきを覚える！



バラ科



マメ科



ウラボシ科

■ 検索表を使うために

- 1) 形態用語に慣れることが大切
始めから検索表を引いても最初は正解に行かない場合が多いです。むしろ、答えのわかっている植物を材料にして逆に検索表でたどることで知らない形態用語を目と体で理解することができます。
- 2) 自分の「苦手な分類群」をチェック
「キク科の担当」「セリ科の担当」など分類群ごとに担当を決めて、同定に責任を持たせるのも良い工夫です。

皆さんのサイトでもぜひ参考にしてみてください♪

2014年冬の調査講習会報告

2～3月は早春が調査シーズンであるカエル類、植生図調査などの調査講習会を各地で実施しました。

2/1 一般サイト「多久」(佐賀県多久市)

九州地方南部の新規調査員の方にむけてカエル類の講習会を実施し12名が参加しました。隣の県で継続的に調査をしている先輩調査員にも参加いただき“カエル目線で環境を見て調査地区を区切る”などの調査のコツを紹介いただきました。

3/1 一般サイト「中須北地区」(山口県周南市)

山口県で唯一の新規サイトである「中須北地区」で地元調査員の方にむけたカエル類講習会を実施しました。新規サイトの方と地元でカエル類の保全活動をしている方など12名にお集まりいただき、保全のための情報交換の場にもなりました。



アカガエル類調査の様子

3/1 一般サイト「山崎、鎌倉中央公園」(神奈川県鎌倉市)

関東地方の調査員の方にむけた植生図とカエル類の講習会を開催しました。市民調査に関心のある一般の方も参加可能な形で実施し約50名もの参加がありました。参加者からは、日頃の活動でも講習会の内容を活かしたいといった感想をいただきました。

3/18 一般サイト「西宮甲山」(兵庫県西宮市)

京都・兵庫のサイトの哺乳類調査カメラ機種切替のための講習会を実施しました。参加者は4名と小規模開催でしたが、各地域に寄り添って活動をされる方が集まり、それぞれの活動紹介もしていただきました。

3/29 コアサイト「樺ノ沢」(岩手県一関市)

植生図とカエル類の講習会をコアサイト「樺ノ沢」で開催しました。岩手、宮城、山形県などから15名にご参加いただきました。講習会後の懇親会では、東日本大震災後の様子についての話題もあり、データを取ることの重要性を改めて認識する時間となりました。



調査のギモン Q & A

*各地の調査員が抱える調査手法や調査結果の疑問について、検討委員会の方に答えていただくコーナーです。

No.6 「得られた数値データの推理の仕方 (水環境調査)」

質問 水色の変化や pH の変化から、どのように水環境の変化を読み取ったらいいのでしょうか？

回答 モニ 1000 里地調査検討委員 (名古屋女子大学) 村上 哲生さん



水の色や pH が、突然変化する原因は様々です。透視度、pH、水色の測定値や、家庭にある道具を利用して、何が原因か推理してみましょう。水をコップに汲んで、濁りがすぐに沈むようでしたら泥濁りです。大雨の後に良く起こります。濁りが沈まないようでしたら植物プランクトンの仕業です。コーヒー・フィルターなどで水を濾してみましょう。フィルターに残ったカスに消毒用のアルコールか強いお酒をかけると、植物プランクトンが共通に持っている葉緑素が溶け出し、アルコールは鮮やかな緑色に染まります。植物プランクトンが発生すると、日中、盛んな光合成のために水中の炭酸が消費され、水はアルカリ性が強くなります。フィルターを濾した水自体が茶色に着色していたら、落葉などの植物からしみ出る「腐植質」のせいです。「森の生活」を書いたソローが、草原のお茶と呼んだ物質です。腐植質は、酸性なので、池の pH も 5～6 程度です。希なことですが、花粉がたくさん飛ぶ季節には、松などの花粉で池の水が黄色になることもあります。データを採るだけでなく、何が起きたかを推理するのが水環境の調査の一番面白いところです。

全国各地で、地道な努力によって蓄積された里地調査データがさまざまな場面で活用されています。各地の活用事例をこちらにご紹介します。

農道工事計画が変更されました

鹿児島県始良市にあるコアサイト「漆の里山」は、集落や棚田を含む中山間地域で、NPO 法人うるし里山ミュージアムの皆さんが棚田の復元活動などをしながら植物やホタルなどのモニタリング調査を行っています。その調査ルート上で、かつてから構想のあった県の中山間地総合整備事業による農道拡張工事計画が進み、ホタルなどの生息地や植生が大きく破壊される恐れが生じました。地元 NPO では事業者である県に対して里地調査の結果やその意義を説明し、NACS-J・環境省からも適宜支援を行いました。その結果、設計図が完成し土地の買収手続きの段階まで進んでいたものの、県の担当部局の方々から理解が得られ、一度決まっていた計画を見直ししていただけることになりました。現在は、できるだけ地域の自然に影響のないよう関係者で話し合いながら新たな計画案が進められています。



漆の里山の風景

アライグマの防除計画策定につながりました

全国的に分布を広げている外来種アライグマが、コアサイト「帯広の森（北海道帯広市）」にて、2013年9月に市内で初めてセンサーカメラを使った調査によって撮影されました。まとまった緑地が残されている帯広の森は生物多様性の保全上重要な場所であり、またエゾサンショウウオやニホンザリガニなど希少な水生生物も生息していることからアライグマの影響が大変懸念されます。

アライグマの発見後、地元調査団体「エゾリスの会」から迅速に市役所へ情報提供と対策要請がなされ、また環境省からも北海道庁に詳細な情報の提供が行いました。その結果、すぐさま市によってアライグマの防除実施計画が策定されることとなりました。アライグマの効果的な防除には、市役所と市民団体・専門家が一体となって取り組みを進めることと科学的な監視・評価が行われることが不可欠です。地元団体による地道な調査やデータ活用が今後も重要な役割を果たすと期待されます。

自治体の自然環境調査に貢献！

コアサイト「穂谷の里山」の位置する大阪府枚方市では、市内の自然環境調査を10年に一度行っています。平成23～24年度に実施された10年ぶりの調査では、地元調査団体「枚方いきもの調査会」の里地調査の結果や他の調査活動の成果が積極的に活用されました。例えば、市内で確認された維管束植物1364種・鳥類151種のうち、里地調査で確認できたものはそれぞれ793種・65種となり、本調査が市内の生物多様性の現状把握に大きく貢献したといえます。

保全を効果的に進めていくためには、優先度の高い場所を見つけることが重要です。しかし、各市町村では予算や人員が限られており十分な自然環境調査が行えないことも珍しくありません。そうした場面で里地調査の調査結果が非常に貴重なデータとして役立ちますので、調査員の皆さんからもぜひ積極的に情報提供をされてみてはいかがでしょうか。

参考：第5回枚方ふるさといきもの調査

<https://www.city.hirakata.osaka.jp/site/sizen/dai5kaisizentyousa.html>

各地で里地調査のデータの活用事例が積み重なることによって全国データ活用へも繋がっていきます。皆さまの地域での活用事例がありましたら、ぜひ事務局までお知らせください。

こんな写真が撮れました

ノスリとエゾアカガエル



～センサーカメラを使った哺乳類調査の現場より～ No.9 「ノスリのハンティングの瞬間！」

堤 公宏 さん コアサイト「帯広の森」(北海道帯広市)

毎年この場所に設置しているカメラには、倒木上を行き来するエゾリスやキタキツネ、ネズミ類などが多く写るのですが、今回はこんな決定的な写真が写りました。下腹部の褐色の斑、羽の色、足の毛などから、この鳥はノスリであることが判ります。そしてその左足に注目すると、エゾアカガエルが捕まえられています。森の中の倒木は中小哺乳類等の移動の場として利用されているほか、猛禽類のハンティングの場にもなっているようです。

事務局より 前々号(11号)でもご紹介した帯広の森で、またドラマティックな写真が撮影されました！

倒木の上は、落ち葉などもなく物音立てずに移動できるため追う側・追われる側のさまざまな動物が利用しているのですね。

♪センサーカメラで撮れたお気に入りの写真をぜひ事務局までお知らせください！ニュースターでご紹介させていただきます。

「重要里地里山」の選定が始まります

里地里山の生物多様性の保全を進めることは我が国の重要な課題の一つです。しかし、今後全国的に高齢化や過疎化が進み、2050年までには現在人のすむ地域の約2割が無人的になってしまうという予測（国土審議会長期展望委員試算）を踏まえると、すべての里地里山において際限なく人手をかけて保全することは現実的に困難です。このような背景を踏まえ環境省では、生物多様性保全の観点から重要な地域を明らかにし、生態系ネットワークの構築の核としていけるような「生物多様性保全上重要な里地里山（重要里地里山）」を選定する作業を、この平成26年度に実施する予定です。

重要里地里山は、科学的なデータと専門的知見から全国規模で選定され、里地調査のデータもこの選定作業に一部利用される予定です。



これまでの調査結果から

5年間の全国調査から明らかになりつつあること

高川 晋一

里地調査では、現在第2期調査期間（2008～2012年度）の結果のとりまとめを行っています。全国規模の調査は2008年途中から本格的に開始したため第2期分のデータは丸4年間分しかありませんが、注目すべきいくつかの結果が見えてきました。

ゲンジボタルの個体数変化が全国的に減少？

農地を流れる小川や（主に西日本では）河川に生息するゲンジボタルについて、全国各地のサイトで個体数の減少がみられました（図1）。里地調査のサイトは比較的都市近郊に位置する場所が多いのですが、ゲンジボタルの個体数減少は岩手・長野・広島・熊本・鹿児島など水田耕作が行われている典型的な里やまのサイトでも確認されました。

これまでの全国データから、ゲンジボタルの生息にはカワニナの生育や水辺の周りの草の繁茂、底質の種類などの様々な要因が影響することがわかっています（図2）。しかし、調査では各調査区画の細かな環境条件を記録しているものの、水田や水路の管理状況の変化は確認できませんでした。生息地そのものに変化がなくとも源流部の森林が開発さたり農地増加により水質変化が生じていれば個体数が減少する場合があります。1カ所でのみ熊本市のサイトで周辺で行われたバ

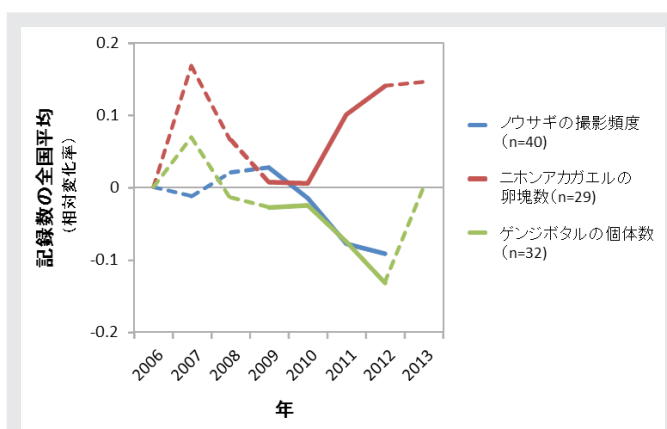


図1：3種類の指標生物の記録数の全国平均推移。調査初年度の値を基準にした相対値（対数変換値）を全国平均した。サイト数の少ない2008年までのデータと、データの回収・精査が完了していない2013年の暫定値は点線で表した。

イパス道路建設工事の影響による川への土砂流入が確認されていますが、他ではそのような場所は確認されませんでした。

ノウサギの減少は過去の都市化の影響？

里やまで普通にみられる生き物の代表格ともいえるノウサギも、過去4年間で全国の多くのサイトで減少傾向が認められました（図1）。特に減少傾向が目立ったのは大きな市街地に隣接する東京・横浜・岐阜・大阪・茨城などのサイトでした。ノウサギなど哺乳類は開発による生息地の縮小・分断化に特に弱いと考えられますが、これらのサイトの多くは緑地保全区域や都市公園に指定されておりサイト内での開発行為がすでに規制されている場所です。もしかすると、サイトの周辺地域の市街化が進んでいることやサイトが過去の開発で緑地として孤立・分断化してしまったことが、時間が経過して現在においてノウサギに影響を及ぼしているのかもしれませんが。なお神奈川県内のサイト4カ所のうち3つではこれまで4年間で一度もノウサギを撮影できませんでした。

ただし、鹿児島や群馬など一部の中山間地のサイトでもノウサギの経年減少が認められたことから、もし

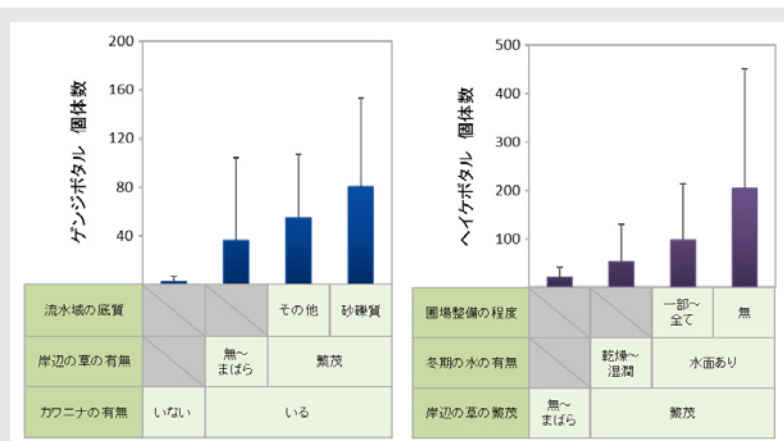


図2：環境条件の違いがボタルの記録個体数に与える影響。調査区画を調査条件に応じてグループ分けし、その個体数の全国平均値をグラフに示した。

かすると草原環境の減少などの他の要因も同時に作用しているかもしれません。

■いくつかの調査サイトでは保全活動の成果が！

一方で、地域の市民団体の保全活動の成果が調査から確認できた場所もありました。例えば、地元市民団体と企業・行政が共同で保全活動を進めている埼玉県的一般サイト「天覧山・多峯主山周辺景観緑地」では、2008年からため池や水田の再生活動が始まった結果、アカガエルやヘイケボタルの個体数の回復が調査結果から確認できました（図3）。全国のサイトでもアカガエルやヘイケボタルには減少傾向は見だせておらず、もしかすると水田生態系の保全については全国のサイトで比較的成果が上がっているのかもしれない。

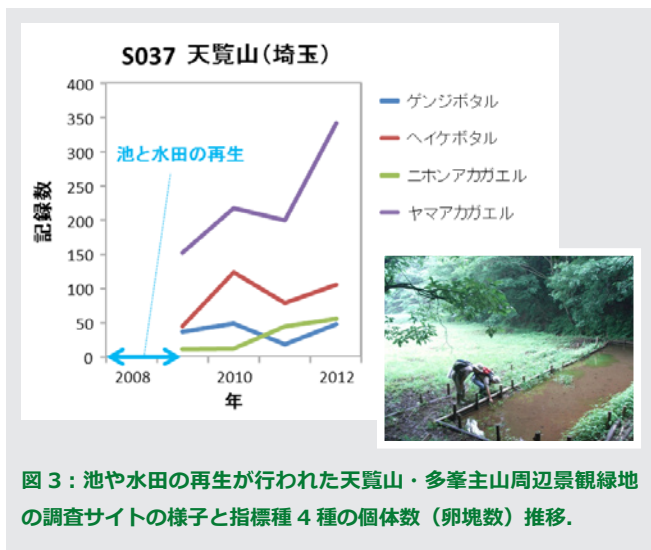


図3：池や水田の再生が行われた天覧山・多峯主山周辺景観緑地の調査サイトの様子と指標種4種の個体数(卵塊数)推移。

■増減の「原因」を探るには？

今までの調査結果から、いくつかの種の全国的な減少傾向が認められたものの、天候不順の年が続くなどで偶然に減少しているように見えただけかもしか生物多様性の危機的状況を表しているのかを判断するに

はもう少し調査を継続する必要があります。ただ、哺乳類の個体数は昆虫や鳥とは異なり年ごとの天候の変化にさほど強く左右されないと考えられるので、今後の推移には特に注意を払っていく必要があります。

得られた調査結果から具体的な保全施策につなげるには、何よりもその原因を突き止めることが重要です。しかし、残念ながら里地調査では全国調査としての調査効率を優先するためほとんどの調査項目で環境条件のデータ(植生や土地利用の様子など)を取得しておらず、生物多様性の変化がどんな要因で生じたかを検証できる調査設計になっていません。また、1カ所の調査サイトでは、様々な環境変化が同時並行で生じることがごく当たり前に生じるため(例えば、コアサイト「穂谷の里山」では5年間で小規模開発、無農薬化、アライグマとイノシシとハクビシンの侵入、大雨による決壊などが同時に生じた)、個々の環境変化の影響を得られた調査データのみから検証することは非常に困難です。そのため、全国規模で何が起きているかを紐解くためには、何よりも各地の現場の調査員の方々からお寄せいただく、実際目にした変化や直感的に疑わしいと感じた衰退要因などの情報がとても重要となります。そうした情報をデータと照らし合わせて初めて、似たような状況にあるサイトが他に無いかを探し、また環境要因を絞って全国データの解析を進め、生物多様性の変化やその要因の候補をより正確につかんでいくことが可能となります。そのため、今後も現場の生の声を、記録用紙の備考欄や調査実施状況報告書、そして直接メールなどのご連絡でも構いませんので、ぜひお寄せください。

なお里地調査の第2期とりまとめ報告書は、今年の夏に公表予定です。市民調査員の力により日本で初めて実現した里地里山の全国規模の定量的な生物多様性評価の結果です。是非ご注目ください。

「いきものログ」を公開しました

環境省生物多様性センターでは、全国的な生物情報を収集・提供するためのインターネット上のシステム「いきものログ」を2013年10月に公開しました。いきものログは、個人で集めた生物情報の管理ツールとしての利用をはじめ、市民調査などの登録フォームやデータ蓄積のシステムとしても利用できます。各サイトでの活動にぜひいきものログをご活用下さい！

■生物情報 収集・提供システム **いきものログ** : <http://ikilog.biodic.go.jp/>



中・大型哺乳類調査のデータ3万件を公開しました

里地調査のデータの一般公開を本格的に開始しました。第一弾としては、2014年3月12日に環境省生物多様性センターのウェブサイトにて、2012年までの哺乳類データ3万件を公開しました。ただし絶滅危惧種など公開によって保全上の問題を生じるデータは省いています。これに続いて鳥類調査のデータ約10万件も近日公開予定です。皆さまからいただいた調査データが保全施策や生物多様性の解明のために活用されるよう、今後も慎重にデータ公開を進めていきます。

■環境省生物多様性センター : http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_mammal.html

モニタリングサイト1000 里地調査ニュースレター No.13 2014年4月号 (2014年4月22日発行)

発行：環境省自然環境局生物多様性センター



作成：公益財団法人 日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F

TEL 03-3553-4104 / FAX 03-3553-0139

E-mail moni1000satochi@nacsj.or.jp

(担当：保護・研究部 後藤・福田・高川)

ウェブサイト

モニ1000里地 <http://www.nacsj.or.jp/project/moni1000>

里モニ <http://satomoni.com>

今回の表紙：一般サイト「中須北地区」(山口県周南市)